

官制
孝義錄

卷卅九

紀伊
淡路
阿波

唱

共五十

庫	文	閣	内
一五七函	五〇冊	三二五八三號	和書類

内閣文庫	
番號	和 32583
冊數	50 (39)
函號	157 399



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



孝義錄卷之三十九

紀伊國

孝行者

紀伊國領人
名草那和依中村

孝行者

日領
牟婁郡奥徳野尾總持村

孝行者

日領
若山城下名領町

孝行者

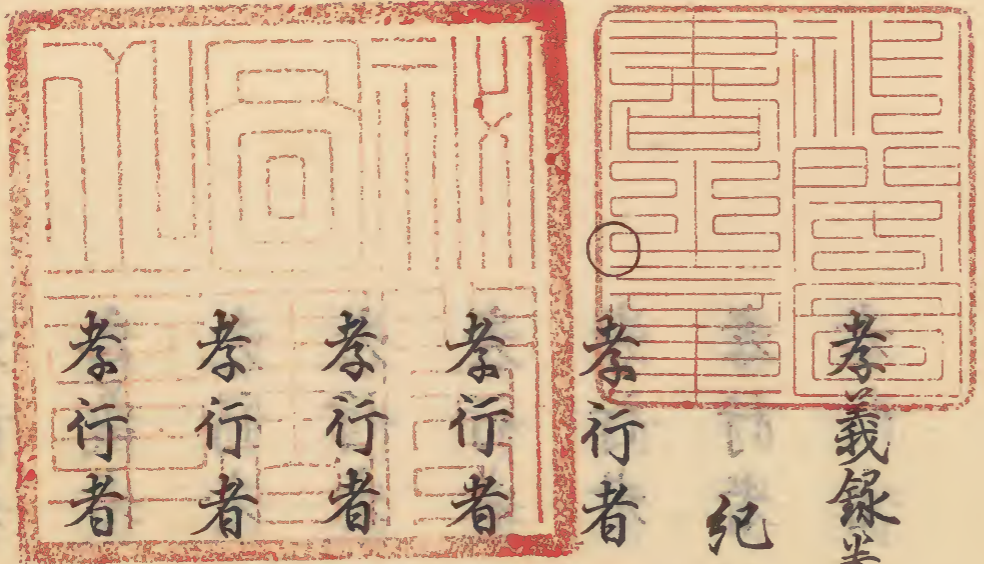
日領
名草那夫田村

孝行者

日領
若山城下本町

孝行者

日領
那賀郡高塚村



百姓

源之師

天和二年
褒美

百姓

久之師

天和三年
褒美

町人

六所之師

貞享二年
褒美

百姓

金之師

元禄四年
褒美

町人
名草那為後家

名之師

宝永二年
褒美

百姓

長次師

宝永二年
褒美

孝義錄卷之三十九

孝行者

日頃 若山城下廣津八百屋町

忠義者

日頃 元家末

孝行者

日頃 那波郡粉河村

孝行者

日頃 牟婁郡田色南新町

孝行者

日頃 日所

孝行者

日頃 海士郡賀茂但小原村

孝行者

日頃 那波郡宮村

孝行者

日頃 那波郡尾崎村

町人

助三郎

寶永六年 喪父

西尾若菜是時法光下女

七女

享保二年 喪父

百姓借倉位

六郎三郎

享保二年 喪父

町人 飯沼助左馬助

次三郎

享保六年 喪父

庄倉

三郎

日時 喪父

庄倉

久之史

享保九年 喪父

百姓長子馬娘

勘四郎

享保十年 喪父

百姓長子馬娘

三郎

享保十四年 喪父

孝行者

日頃 日所

孝行者

日頃 那波郡山崎組中崎村

孝行者

日頃 若山城下佐吉町

孝行者

日頃 若草郡栗栖村

孝行者

日頃 左田郡上津木村

孝行者

日頃 若草郡小波田村

孝行者

日頃 若山城下新垣五次町

孝行者

日頃 若草郡紀三井寺村

百姓

生時

日時 喪父

町人 佐倉屋佐吉

太左馬

享保十五年 喪父

醫者 田中南仙娘

大門

享保十六年 喪父

百姓 太郎次郎

六郎

享保十八年 喪父

百姓

清右馬

元文三年 喪父

町人

重右馬

元文三年 喪父

百姓 長子馬娘

三郎

元文四年 喪父

孝行者 日頃 名草於中橋村

孝行者 日頃 那賀郡別所村

孝行者 日頃 牟婁郡與蘇北山浦

孝行者 日頃 牟婁郡與蘇北林上村

孝行者 日頃

孝行者 日頃 若山城下松原町

孝行者 日頃 那賀郡粉河村

孝行者 日頃 若山城下東中岡町

百姓次身名為娘

百姓

百姓日雇稼

百姓

甚右馬

町人借屋位

公田百姓田名三橋娘

町人日雇稼

世八 元文四年 喪

甚太郎 寬保三年 喪

劫七 延享二年 喪

甚右馬 延享四年 喪

甚七 日時 喪

甚右馬 寬延元年 喪

甚右馬 寬延二年 喪

甚右馬 寶曆五年 喪

孝行者 日頃 若山城下北町二丁目

孝行者 日頃 若山城下坊主町

孝行者 日頃

孝行者 日頃 名草於各高浦

孝行者 日頃 那賀郡上野山村

孝行者 日頃

孝行者 日頃

孝行者 日頃

町人借屋位

盲人借屋位

甚右馬

船稼右身名

百姓

甚右馬

日

日妹

太古馬 寶曆八年 喪

甚右馬 寶曆九年 喪

劫七 日時 喪

甚右馬 寶曆十年 喪

甚右馬 明和三年 喪

甚右馬 日時 喪

甚右馬 日時 喪

甚右馬 日時 喪

孝行者

日領 若山城下大作町

町人 甚右衛門 後家

ろく

明和四年 喪

○ 孝行者

日領 牟婁郡奥越前桃崎村

百姓

半六

明和四年 喪

孝行者

日領 水原郡中山村

去歸妻

去歸妻

安永元年 喪

孝行者

日領 日所

町人

七人

日時 喪

孝行者

日領 若山城下本町九町目

百姓

武八

安永四年 喪

孝行者

日領 牟婁郡奥越前桃崎村

去歸妻

去歸妻

安永六年 喪

孝行者

日領 日所

幼平妻

幼平

日時 喪

孝行者

日領 日所

幼平妻

幼平

日時 喪

孝行者

日領 若草郡栗村

百姓

傳右

安永六年 喪

忠義者

日領 若山城下寄合町

町人 吉左衛門 子代

若右

天明二年 喪

忠義者

日領 日所

文右

日時 喪

孝行者

日領 若山城下東田中町

町人 借屋位 若左衛門 後家

若左

天明二年 喪

孝行者

日領 若山城下淡下町

町人 借屋位 桶屋

長七

天明二年 喪

孝行者

日領 海士郡宇須村

百姓

源右

天明四年 喪

奇特者

日領 若草郡南永植村

百姓

九右

天明四年 喪

孝行者

日領 若草郡九栢村

百姓 源九右衛門 後家

九右

天明六年 喪

忠義者

日頃 海士郡国戸村

孝行者

日頃 若山城下裏町

孝行者

日頃 那賀郡古和田村

孝行者

日頃 若子郡長尾皮田村

孝行者

日頃 那賀郡湯窪村

孝行者

日頃 若山城下新中通町

孝行者

日頃 那賀郡西山村

孝行者

日頃 若子郡栗栖出島村

百姓劫多傳子代

年寄馬

天明七年 褒賞

町人借屋住居在り後家娘

山

天明七年 褒賞

百姓持中布後家娘

の

天明七年 褒賞

百姓久六後家娘

小

天明七年 褒賞

百姓

若

天明八年 褒賞

町人借屋住居在り後家

さ

天明八年 褒賞

百姓子多傳娘

物

天明八年 褒賞

全田百姓

源

寛政元年 褒賞

孝行者

日頃 所

孝行者

日頃 若子郡枕瀬村

孝行者

日頃 若山城下新通町

孝行者

日頃 海士郡今福村

孝行者

日頃 所

孝行者

日頃 若山城下寄合町

孝行者

日頃 紀伊郡家老安原平力領分 牟婁郡十九瀬村

孝行者

日頃 牟婁郡岩田村

源吉妻

つち

日時 褒賞

百姓小七娘

せ

寛政元年 褒賞

醫者

道

寛政元年 褒賞

全田百姓

次

寛政元年 褒賞

次八妻

志

日時 褒賞

若子

若

寛政元年 褒賞

大工

源

宝曆十一年 褒賞

百姓

市

明和七年 褒賞

忠義者

日頃 田之嶺下田之町

町大車寄多屋平次下男

孫助

安永二年 褒賞

孝行者

日頃 年妻於高濱村

百姓幼子高妻

法之

安永二年 褒賞

孝行者

日頃 年妻於内門村

百姓五八才

幸作

安永四年 褒賞

孝行者

日頃 年妻於生馬台

百姓

若七

天明四年 褒賞

兄弟睦者

日頃 田之嶺下本町

町人操屋

勤九郎

天明六年 褒賞

孝行者

日頃 田之嶺下下七町

町人為代屋傳益屋

の

天明七年 褒賞

孝行者

紀伊屋家元水掛對馬之答 在田之東丹生村

百姓七身高屋法衣

名不知

享保十二年 褒賞

孝行者

日頃 年妻於栗須村

百姓

傳口郎

宝曆七年 褒賞

孝行者

日頃 在田之屋尾村

百姓

吉三坊

宝曆十一年 褒賞

孝行者

日頃 年妻於村系村

百姓

長次郎

天明元年 褒賞

○ 奇特者

弓野山茲眼院 伊於那東富之村

百姓

名廻治家 在馬

寛政三年 褒賞

奇特者

日頃 日所

法衣之町

次高屋

寛政三年 褒賞

奇特者

日頃 日所

日孫

次高屋

寛政三年 褒賞

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including a circled character '○' and several vertical columns of characters.

孝行者源三郎

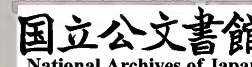
源三郎も名草郡和佐中村の百姓なりと二歳にして
父小をこれ二人の兄と世に早うしてまゝに此婦あ
るも痛多うして源三郎に男とよせし種目正し小
貧しきといふ事ありし母よつて孝ありし事を知ると
時友とらうらははせしむり新斗を飼ふに此乃童ハ
むちう抱心して源三郎の業とてつて母此苦みのを
とけとおきてや人とあはれはひと度飯くす時を
と婦乃ちとうら次母の老衰へて身印をいふに乃
まゝあつれを衣此若く人成はぬこれの記也後ゆふ

半海くも稚子をこつてふくまへくく文の秋とのこ
裸りあつて寝たてあつて先母をりてさやせつてさや
度とさくぬを牛のされまの秋風をさされおとせり
経りつあは枕をやとくり経りつあはつてさやせつて
の解あはは恰の勢いさあはめあつて何れもいひ直夜
をりつてさあき其の田畑はあつてむくけい直さくつて
とく二度二度英吾とていひ道指乃終造とて入吏に
おろすといささふりのさくされもさくさくむくつて母
とおめさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
おろすさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
てをさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

孝行者吉孫
若山乃城下坊主町のうらぬにをさる盲人吉孫と姉の
ゆきささのいふおつてさあき孝行をりて家貧く按磨とる

事と業と一もあつたうせは後つてゆとの後でも
 母の飲くものへ海へ心をもちらむ常は母のそらけと
 るとてはなほさうかゝりし人母をささぐとてはなり
 かなうんやのさうさういふ若孫曰くは療治とてそ
 病室よりついでつたけし母れ子をとりて移んとす
 るとてつけし人れいそ安否とてい脈をとり終る
 買まふとていわけのさうさういふお小あつた母の身
 とあつたさうさう暑れとてと扇扇とてあつたお
 ちとつ移つてさうさういふおれとて母のさうさ
 火とては困極裏の火をい海へつ移し夜もさうさ

母の足をとつたさうさういふおあきとて先日とてお母れ浴せし
 湯へ親とてさうさういふおとてのれとて用とてあつた
 をさうさういふ食事とて海されとてさうさういふ物とて御とて
 先母れ合つたの如くさうさういふおとてのさうさういふ又食とてさうさ
 知とてさうさういふおれいさうさういふお移しとてお母の八十八歳と
 あつたさうさういふおとて利發せしおとておとて中あつたさうさ
 さうさういふお有真とて海とてさうさういふ彼とてさうさういふおとて
 さうさういふお孝養とてさうさういふおとてさうさういふおとて
 さうさういふおとておとておとておとておとておとておとておとて
 さうさういふおとておとておとておとておとておとておとておとて
 さうさういふおとておとておとておとておとておとておとておとて



海へいそめりしと云ふ宝曆九年より一と云ふ事と云ふ事
之入る生涯をみればと云ふ

孝行老母六

牟婁郡奥熊野桃崎村よま六といふ百姓あり母に
是父より入る事孝なる父多病ありして田畑を
もろくは人より賣りてかゝ所なる畑乃と云ふ事あり
小家を借りてかゝ小賣く書く事ありは六も知事附
抱養ありてかゝ斤目と云ふ事ありてかゝみちありに
まゝは乃病ありてかゝ歩むの事ありてかゝ目より
米下浦といふ所にて松物と云ふ運ぶ事ありてかゝ價と云ふ事あり

父を養ひたり米下浦といふ里ありてかゝの事あり
と云ふ事ありてかゝ山坂をいふ事ありてかゝ飯を炊く事あり
と云ふ事ありてかゝ畑をいふ事ありてかゝの事あり
と云ふ事ありてかゝ歩むをいふ事ありてかゝの事あり
と云ふ事ありてかゝ後夜食をいふ事ありてかゝの事あり
と云ふ事ありてかゝ村里乃往來をいふ事ありてかゝの事あり
と云ふ事ありてかゝ米麦をいふ事ありてかゝの事あり
と云ふ事ありてかゝ芋大根の事ありてかゝの事あり
と云ふ事ありてかゝ小米下浦といふ事ありてかゝの事あり
と云ふ事ありてかゝ松物といふ事ありてかゝの事あり
と云ふ事ありてかゝ米下浦といふ事ありてかゝの事あり

是夜を賃もあふ終ふれと酒を先ぬる人ありけれ
 たるく君のあききある夕の物をとるもまはるる
 あらひもつらきかきやうり酒のちをうり付
 八十歳よりうき父のうへふちる毎はすはあつと
 りむぬしものうらなむらうらむらうむらうむらう
 そとさくまうとさあつとひんちんお中の地家の芝居中
 あるとらうは酒者と推入る父のあきりかひつと
 りむらう薪を伐つてきてはく焚火をまくけり
 ぶつと中のまふらふしむらうむらうむらうむらう
 まふらふあつと父のは古と錦入り衣を穿く
 といふ

けらわうりつらう隣りうのんくを妻を近く孝まの
 まふらふまよせうとつむらうむらう父のむらうむらう
 とさ名孝まと及りんとあつとあつと姉妹とあつと
 ぶらあつととあひ嫁ゆれむらう親族とむらう
 ろさうとけとあつとむらうむらう人あつとあつと
 身ととらうむらう孝行をはくむらう村うらむらうむらう
 睦とあつと人くといとあつとあつとあつと
 とらうあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 孝まといふとあつとあつとあつとあつとあつと

奇特者名廻次帝右馬

名廻次房右馬八伊都郡東富貴村にて高七十石りてある百姓
 あり正徳四年より享保二年より村の中國寄
 山中の事なれど田畑を猪麻と踏あらせしと次房右馬
 力とくりてあましくはせとて村もさへもて此
 地を領せよ高野山乃年預坊のりこみ志らくわらむ
 一村のきんぐよの貢とゆれへんるとおもひて反次乃
 まよりして田宅より出る定をゆふし中富貴村
 池をくくりてあましくあましくあらせしと出るのもあ
 りと次房右馬の志よめあり日十年正月次房右馬と
 年預坊よりくくりし池なる事とゆふし人吏

と用る敷をさへしにふふ人も用る海とてりしり海
 うせく日ありて池田とありし長村のまを
 とあれりて人あ正徳より享保のりてふましく道との橋
 乃とて移しと次房右馬の力とてりてあましくわ
 敷事とも敷ありしと屋敷を此貢を減しとてりて
 む後同十年に正徳坊より沙汰をり村のうらむのり
 年頃次房右馬のりあましくわらむとてりてあましく
 とてりて耕とてりて定先と二分ありと次房右馬は坊
 んるとあましくわらむのり次房右馬のりあましく
 次房右馬のり文書とてりてあましくわらむと述ぶ

新とあれまゝに某十石つゝ村の貴あゆと一人
しあふれ海人は是と村らら此れは僕りんとあひく
とうけまのいれりゆふりゆあつるまらんりき
うりけ村を救えんまあまのいれりゆふりゆあつるま
のちりゆと人くはあまのいれりゆあつるまら二分のうち
一分をうけくのあら一分を村のうらにうけまらゆと
小まらゆ年領坊より文書と出して徳とまら同十二年
四月洪あつて東西乃富貴村悦嶺まらゆは次第在まのハ
カ派及く修理し筒番村とあ富貴村の信毛まらゆ
まらゆ此貢物をうりゆとあまら寺社乃被れゆと

はまらゆいそま村乃困窮とまらゆ正徳享保の以儀死
乃人多くゆりゆとあまら此れまらあまら山ゆらら魏光
院は位牌とまらゆ跡を吊ひゆら寛延二年十二月
領坊より次第在まゆは命して山林の支配とあまらゆ
に年領坊よりあひく己一人つゝまらゆらまら村のうら
ゆはまら小支配ゆ山林ゆあ氏十七人ゆ己う領と出
して来ゆあまら又金二十兩と出して奥院よりゆらと
つゝまらゆ此貢物ゆと人まらゆ一村ゆゆは次第
右邊ゆと深く信まらゆのあまらゆに次第在まら苗字と
ゆら氏神の祢号とまら名廻ゆ神と稱ゆらゆと寛延

二年壬辰坊より銀共とてあつて復たせしむる
曆八年八十餘歳して病歿其子より次希有とて
持高四十一石に斗六升の百姓より紀伊國伊勢郡持高
和國六條十津川熊野山へうつり乃乃鴉とせしむる
一人の力と以てはくり之をてらの屋敷とたると修理
先乃年疫癘とてかゝりし時富貴村の力共とてあつ
とくに家別より一斗とつて入村らうられあつし
やうも斗もくぬ民あれて價とつてあつしとて
く衣あつしのもは衣をあらうり其孫も又次希有と
とて持高二十二石に斗六升とあつしとてあつしとて

村らうちのりれを以て銀とてあつしとて
金一兩の畑とてあつしとてあつしとて
そら事とて田畑乃塚と論とら事とてあつしとて
地とつてあつしとてあつしとてあつしとて
のりれ徳堂といふとてあつしとてあつしとて
とてあつしとてあつしとてあつしとてあつしとて
つとてあつしとてあつしとてあつしとてあつしとて
次希有とてあつしとてあつしとてあつしとてあつしとて
村らうちのりれを以て銀とてあつしとてあつしとて

孝ありてふくむ村人の困窮をりてふくむ八年領坊より
 銀とめりて賞しりてけ村より明神の森よりふりあり
 法起菩薩を安置しりてあそく一村の法守とありて
 右馬の家れりてふくむの故よりりてあり
 父母は孝ありて後約を年かきく父祖の風とありて
 天明八年六月地改りてふくむ意眼院より褒賞あり
 て袖一版とありてふくむの故よりりてあり
 寛政三年正月
 清褒ありて銀とめりて賜せり

孝ありてふくむ村人の困窮をりてふくむ八年領坊より
 銀とめりて賞しりてけ村より明神の森よりふりあり
 法起菩薩を安置しりてあそく一村の法守とありて
 右馬の家れりてふくむの故よりりてあり
 父母は孝ありて後約を年かきく父祖の風とありて
 天明八年六月地改りてふくむ意眼院より褒賞あり
 て袖一版とありてふくむの故よりりてあり
 寛政三年正月
 清褒ありて銀とめりて賜せり

淡路国

孝行者 松平河波子領分 三系郡湊浦

楠所

六左馬 四十三歳 享保十六年 褒賞

孝行者 日向所

百姓

山一 四十一歳 日向所 褒賞

孝行者 日向領 津名郡尾高村

百姓

安之丞 四十歳 元文四年 褒賞

孝行者 日向領 三系郡牛内村

町人 日向所 三系郡牛内村

林太郎 二十一歳 寛延三年 褒賞

○ 忠義者 日向領 津名郡例本通筋外町四丁目

大工

長四郎 四十七歳 宝曆三年 褒賞

孝行者 日向領 津名郡廣石下村

百姓

伴助 二十八歳 宝曆九年 褒賞

孝行者 日向領 三系郡大井村

岩市郎 四十二歳 明和元年 褒賞

孝行者

日頃

卷中序妻

孝

日時

孝行者

日頃

町人松澤本屋

孝

寛政元年

孝行者

日頃

町人折屋

貞吉

寛政元年

孝行者

日頃

百姓

武平

寛政元年

孝行者

日頃

百姓

市蔵

寛政元年

孝行者

日頃

百姓

石右衛門

寛政元年

孝行者

日頃

云田百姓

甚作

寛政元年

孝行者

日頃

大工

吉之助

寛政元年

津名郡洲本通筋外町二丁目

津名郡桑原上村

津名郡下田浦

二系郡安住寺村

津名郡洲本通筋外町二丁目

忠義者 彦四郎

彦四郎ハ津名郡洲本通筋外町二丁目北高人の内を右
藩に召し入りし下知事より生れハ二系郡上八木村のむね
幼少より父に右藩の事は久しく二十五年に召し入りし
勤先事り常に忠義を以てて巷をうろちりてせしり
さう小恥らふ事なくもせしり且も藩の事あるもの
思ひていささかとてさうとてさうとてさうとてさうと
至も感して年以てまじやうに人ぬきと家をもつら
ころより人ぬきと貪くしあ別母家あるころも小
海より久しかりし後とてさうとてさうとてさうとてさうと

乃張を定めりよとて我身あはしんは一人りて
 せんとしつゝ終りんる是れ未だうらへ雅きより恵と
 うけし母君の先途をとり見返すもあれは我身のみ
 ちうま入る心にさうけりしうとてま後と城下をひま
 て物うらとあめりさう種よま人もひひく憐れ附まら
 ことりぬれとてかめぬのなほとて入るはあひて
 から此利便とせよとてつゝあはれとてなりひひよは任をり
 常に物うりもあはれ家より得たる米をゆきあはとて
 又も前裁りわらう此野菜やうの物やう極つゝぬか
 全乃産業とてことりぬてと右邊の病よりけしと

首を高くを勵とてあ育造るはよゆとてもこつ夜とて
 ちりつゝ一夜とてさうあ抱し一時的なるといふ事
 かうしつゝ終ふまはせぬとてあもゆとて右邊とつひ
 借金をして古れ器物あはとてさうとてあはれとてあはれ
 乃使とてさうしつゝ終ふとてあはれとてあはれとてあはれ
 つけしつゝはまはれ母と懐とて衣服とてさうとてあはれの文
 多成もさう結へと我身ハハれえり目とさうとてあはれとて
 しつゝとてあはれとてさうとてあはれとてあはれの妹乃ありのれを
 何内を法有馬といふの妻にあはれとてあはれとてあはれとい
 といひくゆれとてさうとてあはれとてあはれとてあはれの料乃

あれを費したる日とありては... 許小よりせり... 舟の石を以て... 孝の貴小ありん... カリてい... う水附... 孝の貴小ありん... カリてい... う水附... 孝の貴小ありん...

河波國

○孝行者 松平河波守領分 那賀那岩服村

○孝行者 日頃

○兄弟睦者 日頃 板野那秋田村

○貞節者 日頃

○孝行者 日頃 海部那完喰浦

○孝行者 日頃

○孝行者 日頃 板那那大佐泊浦

能治

次左衛門 五十五歳 正徳元年 褒賞

名不知 五歳 日時

長右衛門 五歳 享保八年 褒賞

七門 五歳 日時 褒賞

佐次郎 二十九歳 元文元年 褒賞

五十二歳 日時 褒賞

勘六 五十四歳 元文二年 褒賞

孝行者 日頃 海部郡相川村

孝行者 日頃 名東郡中村

孝行者 日頃 名東郡上八方村

孝行者 日頃 膳浦郡方上村

孝行者 日頃 美馬郡眼町

孝行者 日頃 名東郡中村

孝行者 日頃 美馬郡一字山

孝行者 日頃 海部郡日和佐浦奥河内村

百姓

吉左馬 室曆十一年 褒美

百姓

八郎左馬 明和二年 褒美

醫者

瑞朝 明和二年 褒美

百姓

清五郎 明和二年 褒美

町人

湯淺孫左馬 明和二年 褒美

百姓

佐吹左馬 明和二年 褒美

公田

吉左馬 明和二年 褒美

公田

林三郎 明和六年 褒美

孝行者 日頃 佐島城下南大工町

町人 平石左

吉左馬 天明五年 褒美

奇特者 日頃 佐島城下藍屋町

町人

松浦武左馬 天明八年 褒美

奇特者 日頃 佐島城下紀伊町

町人

三木金左馬 天明八年 褒美

孝行者 日頃 佐島城下南大工町

町人 伊左

理左馬 寛政元年 褒美

孝行者 日頃 那賀郡西路見村

百姓

熊右馬 寛政元年 褒美

孝行者 日頃 日所

德吉左馬

加津 日時 褒美

孝行者 日頃 那賀郡橋浦

公田百姓

字左馬 寛政四年 褒美

孝行者 日頃 日所

字左馬

字左馬 日時 褒美

孝行者 日頃 膳浦郡中田村

孝行者 日頃 膳浦郡大松村

孝行者 日頃 海部郡大里村

孝行者 日頃 膳浦郡江田村

孝行者 日頃 日所

孝行者 日頃 膳浦郡江田村

孝行者 日頃 海部郡日和佐浦

孝行者 日頃 那賀郡谷島村

百姓

虎右馬 寛政四年 褒美

百姓 長右馬

長右馬 寛政四年 褒美

百姓

勘七 寛政四年 褒美

百姓

長右馬 寛政四年 褒美

百姓 長右馬

長右馬 寛政四年 褒美

五人組

武八郎 寛政四年 褒美

五人組

記助 寛政四年 褒美

全田百姓

市松 寛政四年 褒美

孝行者 日頃 日所

市松 日時 褒美

奇特者 日頃 板野郡中島浦

浪人 文作 寛政四年 褒美

孝行者 日頃 美馬郡森中島村

庄屋 住友九右馬 寛政四年 褒美

孝行者 日頃 佐多城下二軒屋町

町人借屋住新屋 類之助 寛政四年 褒美

孝行者 日頃 佐多城下佐古町三丁目

町人借屋住笠屋 己右 寛政四年 褒美

孝行者 日頃 佐多城下佐古町三丁目

百姓 金若 寛政四年 褒美

孝行者 日頃 麻植郡東川田村

百姓 曾右馬 寛政四年 褒美

孝行者 日頃 麻植郡東川田村

百姓 宇山本平 寛政四年 褒美

○孝行者

日領 徳島城下依古町六丁目

孝行者

日領 名東郡北淡浦

孝行者

日領 徳島城下中町

醫者

武市良策

寛政四年

馬士

若菜

寛政四年

町人借屋住山下屋付高橋

中

寛政四年

孝行者

日領 徳島城下

孝行者

日領 徳島城下

孝行者

日領 徳島城下

孝行者

日領 徳島城下

孝行者

日領 徳島城下

兄弟睦者長右衛門

長右衛門は板野郡新田村の百姓なり兄を作嘉徳と云ふ
つゝ愚を信りのおもむ世渡りお業をあらは長右衛門と云
信乃申買ひいしてゆゑ事々々信をいけりおこりおとなはお
とすおお兄小つゝ日毎の月夜いそく兄にゆゑいそく
おとすおお兄小つゝ日毎の月夜いそく兄にゆゑいそく
人乃信漢をわけて信をいそく其身此才免とてその村よりて
よひ遠へて親族をいそくおとすおお兄小つゝ日毎の月夜いそく
ゆゑいそく位高公女へておとすおお兄小つゝ日毎の月夜いそく
おとすおお兄小つゝ日毎の月夜いそく兄にゆゑいそく

くさるん事ある年頃乃秘しひる事とてはすもつれを己妻
 婦を産むれのとゆて業をせけり後小終るはら
 臨漢をもわひとて家まゝあ建ふ兄の家族とて毎り
 年もよや六十をあらは是婦子もと合をくわ人ありけ
 ろうつとて家と造りて回くことと見うし初はむと
 く臨漢乃働とせうすれとひ乃事ひ兄の吏婦は海
 せまうんはんりさうさうく睡く言とあり兄は
 二人は女子れありはれをもとの力あく進まよふ先らせ
 兄はさういひるさうはれとやけはぬ事も受け
 是とけらま色とておとけ父母乃ひくは教ひとせり

志うれとありて一族は睡く人の吏とてさう決置れ若
 むは兄よとありて情を如くさう著とつてさう事とて
 じつと費多と事とてさうは吏物も小西行はら
 やうなうりさうの享保八年二月頃まうと獲美とてさ
 眼指さけりさゆふて宅地の首をさけりさ妻りて
 錢をささうせり

孝行者佐次之傳

海部郡光喰浦乃漁師佐次之傳は家極く貧しく老
 約とれぬり存とれぬ母は養母とてさうとありさ
 うな魚を食をふらさ母をさひさうさう母とて六十

あゆみは目一むく物と入りては遠くはるはるは
 芝居をうとせけりかきかひゆき音出さすやあや
 一海をうり一とせを里仇催しく領主より業を
 張りある事ありしはこれ業と反じいふはる家の
 内乃りの山とくもは次妻も仇てんかあつては
 屋せ表へしつとくはしけとまらぬよのこをぢ
 妻もまてまに目一とせれつてあつては子よあ
 する種ありとてうりて浦きふゆはく出いらぬは情を
 さし粥焼飯やうのものどりの屋うくうして仇は
 志乃つとて母はこれ病とゆく佐次を病うは田のあ

ひとまらせりわは泳場乃難をよ志的はあつて中
 多とにんととんとをそく藝はれりてを悲し言はけ
 けと婦と目一業をうりたる市多き勝とつてのよ娘
 産て後るやとけりう市多き母と人負者よくは
 やせくぬ抱きんるもらふもつせ好く婦を成家よ
 遠く業ととふあつてはのうまのりありとて又目一
 浦りとし従身の市多きとらひの漁船とらひ
 淡也乃言はとあつてはなつてはとて余は
 のはくは業をよとせけりう市多きは産業よと
 愛ふとてしてうり賣くありゆは漁乃具とら好く

魚沼の事もよくしりぬは飯料を人をもつたれは
宗祖もきえりかかと杖次は勝はきり小くはつては
り宗祖もきえりかかと杖次は勝はきり小くはつては
り宗祖もきえりかかと杖次は勝はきり小くはつては
り宗祖もきえりかかと杖次は勝はきり小くはつては

孝行者揚綱

名東郡上八方村乃醫者揚綱と云はつて人々孝の物
よくしりぬは飯料を人をもつたれは宗祖もきえり
かかと杖次は勝はきり小くはつてはり宗祖もきえり
かかと杖次は勝はきり小くはつてはり宗祖もきえり
かかと杖次は勝はきり小くはつてはり宗祖もきえり

とけきりしり母をよきあつては又も父に後きり
けきりしり母をよきあつては又も父に後きりけきり
しり母をよきあつては又も父に後きりけきりしり
母をよきあつては又も父に後きりけきりしり母を
よきあつては又も父に後きりけきりしり母をよき
あつては又も父に後きりけきりしり母をよきあつて
は又も父に後きりけきりしり母をよきあつては又も
父に後きりけきりしり母をよきあつては又も父に
後きりけきりしり母をよきあつては又も父に後きり

孝行者佐次

名東郡中村乃佐次は勝はきり小くはつてはり宗祖
もきえりかかと杖次は勝はきり小くはつてはり宗
祖もきえりかかと杖次は勝はきり小くはつてはり
宗祖もきえりかかと杖次は勝はきり小くはつてはり
宗祖もきえりかかと杖次は勝はきり小くはつてはり

人などちかきしつ母はさうしつはも物程とていふもあはよ
 やとて我子れ扱ひもいふしつはもいふはさうちからに
 二人の女ありてふをさういふは嫌うせと一人乃かまあふを
 此は女抱しとて幸ふ母をばさういふ養ひんもさと思ひ
 家族まうふはよはつせあふもあつていふはさうしつは
 歳をとも具さ次母さういふはさういふはさういふはさ
 ん乃さういふはさういふはさういふはさういふはさうい
 湯菜食物もさういふはさういふはさういふはさういふは
 けをさういふはさういふはさういふはさういふはさうい
 主人にさういふはさういふはさういふはさういふはさうい

費をうへていふはさういふはさういふはさういふはさうい
 けは食物とていふはさういふはさういふはさういふはさうい
 せいのめをとも扱ひく著をさういふはさういふはさうい
 あまも個へ出さういふはさういふはさういふはさういふは
 といふは農業乃勤也かともいふはさういふはさういふはさ
 といふ食物をさういふはさういふはさういふはさういふは
 九十歳よりさういふはさういふはさういふはさういふはさ
 ん乃いふはさういふはさういふはさういふはさういふはさ
 といふはさういふはさういふはさういふはさういふはさ
 といふはさういふはさういふはさういふはさういふはさ
 といふはさういふはさういふはさういふはさういふはさ
 といふはさういふはさういふはさういふはさういふはさ

しと母をせりしつらんらんふとせるとおらん
と頼りしつらんらんふとせるとおらん
をんうお志乃おれうあれ一村のあうと賭く
ひのうとあひさひあひとふううとく飲まうり
そとくは銀とくせく貴せくハ明和二年二月の事
りけま

孝行者勘七

海部郡大里村の百姓勘七は父の病一を癒せし人の
田畑を牛作し又と菟つと飲申と母後とてうく父
母れまうと健うたうとらふ程と人の村うとゆとて産

業成やとあけらうせくゆらつとたんと暮しけし人
一月あかりも遠苗せん月とておぬとととぬと
乃年小のうてそとせと比はう好うと得申来ぬと村
うと耕作をたうぬらけし人とを抽て力とそとと
くといと家小得とてうとせ伊勢の官居と治つと
慈と映とあひとかう程あととととや思ひん行
あまおととに海して出立ると母は七年とりの積
病うとととととととととととととととととと
つと罵るととととととととととととととととと
作りしてはつとととととととととととととととと

てあつて先般申すも志をく記し菓子又は麦粉の類
 とどろめ厨乃をいひ申す無きとけしつ寶曆七年
 九月六十一のまうりもあ彼ら勝手はつてさうさうあり
 ぬ父と酒と候と候好りあふりて市のゆらさうりは
 わき瓢は酒をわひく束おしきしうと父乃あしれえ
 ころ先くうはさ後ささうりてさうりてはけり又
 候らふあよも物さくゆらく春ぬらうとさうりてさう
 うらよ束めさうりぬ胡さ家衣乃暖らうと服さ父は
 是を色さされ身と矯辨つ川をゆささく田畠の稼
 ぬおゆらささうり休らとささささささささささささ

九千とあえさ安永二年五月をささささ後さささ六
 枚志あら小家それと父つ後よ記外せり常は八是と
 もゆらささ又父母のありし時こそも具して親しき
 出入りか敷とさささ志とさささささささささささ
 必ゆさささ松さささ春の役ささささささささささ
 の墓の塵拂さささと年毎よ常とさささ市は出ぬら付
 と必さささささささささささささささささささ
 さささと價をささささささささささささささささ
 ささそれの業もさささささささささささささささ
 ささささささささささささささささささささささ
 ささささささささささささささささささささささ

他乃里の人と人ともいふが説き及やうりりありぬる者
なうりしこそ又田畑はめりめり之親の位牌は向ひ
てあるが畑も人いへるめりしに地はねむりし
るんと圖をさけりて定先父母の志日ゆえに食の
新そよひつと人いへるめりしに地はねむりし
諸士の間はすれ又かか母の養と通れかき言説を
りりかきめりしに地はねむりしに地はねむりし
拭ふと服て去れり高かたに地はねむりしに地は
めりしに地はねむりしに地はねむりしに地は
技拍も人いへるめりしに地はねむりしに地は

孝行者長右衛門

勝浦郡江田村乃百姓長右衛門の父の世より田畑かく人の
田を預り作りまこころ母系してむい液まりの父を六
ころかゝ六十とらぬまて母系の業をたのめぬとあ
酒はぬとけとと家費くくす價も常に走くまると
性来とら小松徳浦この所よりとめた北海うる家
くと先よりあ父の酒をあらんよ、價もくるとはよ
ゆきまのれとれとれとれとれとれとれとれとれと
僕ひるはれといつとぬ酒をあらんよ、價もくるとはよ
り長右衛門の妹とと門といふく兄と向く孝まんと

一、あるういふ好る中人は六と此妻をかくやうに
 二人のゆれ源く欲れ母人かうくつ日けひ給とん
 二人乃れれをあられどおんはなうもをくしてふ
 是く給とせかとおをすらふおひをせんと父
 あられとや思ひらん十三年あふり又おを近へくこの後
 母はかくちうぬ父を十七年あふりこの家業とてお
 さいきくほをのて飲れれとかくくあその價とま
 るひらふういぬく碎れらう人うてはおねとくさ
 ちうて争論さうくおの事志とくあふり長有徳の
 ちうちわくこととせらうて慈よんお倦けるよそ人

その志は感してゆれくあかふらふとも領主
 中えしふ父とてお而け乃のなれと替りもつら
 文婦の孝行は母をあくゆふくきく給よ二人の
 のれを貴くして銀とてとくさうてせと給と寛政
 四年正月のし事なりと

孝行者武市良策

徳島乃城下佐古町六所目の醫者良策と伯父乃
 武市石助の養子とふりてく醫術とを學ひくつ六
 されようは父此術を傳えつを實の父母の家よ近
 ちあはむむらうよ業あふりれを教うひく免やとく

言くけり養父の不助をいふきりのを飲又酒
 とく好むを解ぬる時之節さるるをたつて罵
 りたれといふもわらうらふ事あり寛政二年養父
 をうせぬるを病のあひて醫療をもなれぬあはれは
 のこつ涙をいれ或日さぬこれ指さすは養父の
 扱ひを家族はあはれとていふとれつゝあはれをく得
 りしむゆゆれぬのよ女吾とていけりよ不助の志を
 とるしゆゆゆゆみよ目と見えしゆゆゆゆゆゆゆ
 をと驚くぬるそとてこの妙くは怒り枕をとらてふ
 けつも頼小疵おとせりかといふ小根をえさるるり

て言葉を和らげけりてとていふも種くわねとを
 心成るるそと人ありはさるるあやゆらさるるけ
 ろくつてとてなん若母も又とゆとておれぬあ良
 兼成悪もあそつたぬる事孝にさるるといふも
 恨とて次交誼のあつさるるどかから物毎は薬合する
 けも母のうらみはえなりて下部の母とあつて人死す
 らをつめりつむう遠くへ旅さるるせよといふも母のを
 とけりてさるるつれりいふまんやうあつてつれよと
 心小ゆるせ妻もまておれぬよふとてつて離別とてふ
 し存とてさるるを泣きさるるぬ身さるるつては

産せし後生れしふい近入るる人契約しあ出ら
ぬと云ふ事ふらむとやあらん里にゆらん
りやと強ひてゆらんやと云ふもいさ次あま川
之貫目の銀あまらんやと云ふと云ふと云ふ
里ふららんやと云ふ幾種なく口出の靈場を巡礼と云ふ
て里とりあ又も家に出らんやと云ふ良策信ひ初より
はつらんやと云ふ親族乃あまらんやと云ふ
きりてかへしと云ふふと云ふゆらんやと云ふ親子の契
と云ふと云ふらんやと云ふあまらんやと云ふ
らんやと云ふらんやと云ふあまらんやと云ふ孝表せし
らんやと云ふらんやと云ふあまらんやと云ふ

寛政四年六月獲美しと銀と云ふ人生涯課役を免
除せり

孝義錄卷之二十九

...

...

